慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	井筒俊彦著, アラビア語入門(慶應義塾大學語學研究所, 語學論叢)
Sub Title	
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.1 (1951. 7) ,p.114- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

井筒俊彥著　アラビア語入門

（慶應義塾大學語學研究所語學論叢　昭和二十五年九月、慶應出版社、四百圓）

(一)

古代アラビア人の考え方によると、世界のはてをアル・カーフと云う山がとりまいていると云うことになつていた。古代シナの崑崙山の如く、一種の神祕境で、千夜一夜物語などを見ても神怪魔性のものの住家になつている。後世になると崑崙山も中央アジアの一山脈ときまつた如く、カーフの山もコーカサス山脈の事になつたのであるが、本來は單に觀念の世界にえんえんとわだかまつた大塊であつた。確にあることはわかる。氣になつてたまらない。若し、その麓に辿りつけたら、あらゆる驚異に接し得るに違いないが、さてどちらに向つて、どの位行つたらよいものかその端緒もつかめない。そう云うあこがれ、いらだちが明かに彼等の殘した文獻にもあらわれている。

アラビア語でしるされた無數とも云うべき文獻の存在は異邦の知識人にとつては、このカーフの山にも似たものであつた樣に思う。宋末（一二一七年）泉州の港で日本の某留學僧が手に入れたペルシア語の詩二首は極東に殘つたアラビア文字の文獻として最古のものであるが、それ以後、アラビア語やペルシア語を研究した人は本邦には現われなかつた。やつと明治以後に至つて、西アジアの文獻に對する關心が起つた如くである。

明治以後の、我國に於ける西アジア文化研究を回顧したら、相當多量の資料を得るであろう。また優秀な人々も現われたのであるが、遺憾なことに散發的であり、一つの強い組織を作るには至らなかつた。かつ、これらの人々を充分に活動させる社會の支持もなければ、豐富な文獻の蒐集もなかつた。アラビアやペルシア、トルコ等の古典類が一通り揃う（歐米學者の校勘した版本だけでも）と云うことも、望めなかつたのであるから、珍らしい稿本類を集めるなどと云うに至つては全く夢の樣なことであつた。それ故に、どこか遠くに、限りない驚異の世界があることを知り乍ら、どうして近づくかもわからぬ苛立たしさを感ずるばかりで、所詮、西アジアの文化は我々にとつてアル・カーフの山なみに似たものであつたと云えるのである。

右の樣な事情から脫し得なかつた我國の學界に井筒氏の如き卓越したアラビザンが現れて、本書の如き好著を世に送つたと云うことは、殆ど奇蹟的の突發事と見る外ない。序文中にもアラビア

語が極めてむずかしいものであることを說いてある。「精巧を極めた、そして無限に複雜な機械を持つ時計のようなもので」、纖細、複雜にすぎ、しかも驚くべき語彙の豐富さの上に「よくもこれほど種々樣々な意味が出て來たものだと感嘆せざるを得ないほどに一々の單語の意味領域が廣い。だから英佛獨のような近代ヨーロッパ語の一つを學習するつもりで此の言葉に向つたなら、挫折することは初めからわかり切つている」と著者自身も云つているのである。井筒氏が異常の天分に惠まれた人であつて、尋常人から見れば、驚くほどの容易さで多くの言葉を征服して行かれた事は、誰も認める所であるし、またそれに注がれる努力・熱意さも容易に他の模倣し得ない所である。その人が、むずかしいと云つているのであるから、いかにこの言葉が難物であるか、今更くどく言葉を費す必要はあるまい。筆者の知人にチェッコスローヴァキア人で、プラーグ大學で言語學の學位をとつた人がある。お國柄か、スラヴ系の言語が專門であつたが、或日「アラビックか。あれは most complicated で手におえない」と云つた。私もこれは正直な人であると思つて同意を示したのであつたが、何と思つたか「この夏、輕井澤でやつて見るから、何か文法書を貸してくれ」と言い出した。例の Method Gaspey-Otto-Sauer 中の Thatcher の Arabic Grammar を出した所、いそいそと持つて去つた。秋になつて歸つて來たので、どうだつたかねと訊ねると「あれは頗るドライな本だ」と云つて多くを語らない。チェッコスローヴァキア人のアラビア攻略は結局ものにならなかつたらしい。

（二）

實際、歐洲各國語によるアラビア語文法書は數多いが、或は簡にすぎて何の事かわからず、或は專門的にすぎて初學にはとりつき難く、或は本當にドライで面白くなく、うつかり取り組もうものなら、時間と精力を吸い取られた揚句は、戸外に突き出されるだけのことである。歐洲に於けるアラビック研究はルネッサンスのころに初まつているから、根底は深い。しかし、アラビック文典に新時期を劃したのは十九世紀初めの佛國の Sylvestre de Sacy のものであろう。これから以後のもので、多少なり右の書の影響を受けていないものは先ず無いと云つてよいのではないか。有名な Wright の文典の如きも、Caspari, Fleischer, Smith, de Goeje 等の研究の結果が加わつて今日の如き第三版の内容となつたが、もともとの骨格はド・サーシーの書から出ている。一九一一年に出た abbé Périer の文典の如きも、その影響を脫していないと云われている。しかし、獨の Socin, Brockelmann らの文典が現われてからは、面目を一新する事になつた。佛の Gaudefroy-Demombynes の Grammaire de L'Arabe Classique, Paris 1937 は佛國學派が、獨逸學派の目覺しい躍進に刺激されて立つた一例

と見てもよいかと思う。

井筒氏の新著は、勿論、歐米のアラビア文法學の主流を十分に研究された上で書かれたものであるが、さればと云つて、ただそれを移植したものではない。同氏はアラビアの文法學者の著述をも多數讀破した人であつて、獨自の見解を持つていられるのである。いわば、日本に於けるアラビア文法學を創設するだけの見識を立派に持つてこの書を書かれたのであつた。故に本書は、頗るオリジナルなものと云わなくてはならぬ。云うまでもなく、標題にも示された如く「入門」書であり、初學者の手引きとして書かれたものであつて、この點ライトやブロッケルマンの立場とは性質を異にする。或人が、「今迄、種々の文典を見たが、どうしてもアラビックは、わからなかつた。しかし井筒氏の新著を讀むと實によく理解出來る」と云つているのを聞いた。これは本書が入門書として書かれたためもあろう。しかし、その人の讀んだ他の文典中にも同じ目的を以つて書かれたものがあつたに違いない。それにも關わらず、この書のみが、よくアラビックを理解させてくれると云うのは、日本語を以つて、日本人に解る樣に書かれてあるためであつて、井筒氏の苦心された新しい方法が立派に成功を納めた事を證明するものでなくて何であろう。とすれば、これを適當に他の言葉に飜譯すれば、その國の人にも矢張り非常によく解る文典となるのではあるまいか。

本書は二十二講に別れ、各項に譯讀一つを入れてある。それが皆、著者が讀破された多數のアラビア文獻中から、色も香もめでたいもののみを摘みとつて來て、一語一語と深切に解釋を加えたものであるから、滋味に溢れ、よく文法書にあり勝ちなドライに流れることをふせいでいる。

以上勝手な意見を述べたが、淺學な私は不幸にして、本文典の構成がどの點に於いて特に精であり秀であるかなどを細論する力を持たない。また本書が、著者のアラビア文法に關する蘊蓄の最奥を示したものでない事も明かである。ただ序文に、アラビア語學習の必要を痛感しながらも適當な手引がなくている人々のために「その最初の數歩の親切な同伴者となることだけを望んでいる」とあるのは、少しく謙遜にすぎるであろう。確に親切な同伴者である。それと共に、アラビア語文獻の園に迚り入る人々にとつては、相當に後まで、この書を手離せぬのではないかと思う。もつとも、アラビヤ語學の道程が極めて遙かのものであつて、本書に示した内容の如きは、ほんの數歩のものにすぎぬと云う意味ならば首肯出來る。

(三)

著者は序文で、何らかの意味で東洋に關係する學問をしたことのある人は、アラビア語の確實な知識が如何に必要であるかを痛

感している筈だ。あらゆる觀點から見て、東洋學に於いては「アラビア語とサンスクリット語とが、語學的に第一等の重要性を有つ言語であることは先ず間違いのないところであるらしく思われる」「事ひとたびアラビア、ペルシア、トルコ、インド、マレイ等のいわゆる回教世界に直接關係して來る場合には、アラビア語が自由に驅使できないかぎり、學問にも何にもなりよう筈のないことは誰の目にも明かなのである」と云つている。ここに東洋學と云つているのは所謂 Orientalism にあたるものであろう。我國で普通用いる東洋學の意味ならば、更にこれにシナ文化圏を加えてその無限に近い文獻を加えなければなるまい。

アラビア語文獻を無視することは、數百年に亘つて世界文化の主流をなしていた所謂サラセン文化を無視する事にもなるのであるから、これは成程亂暴な話である。しかし、よく考えると無視したわけでなくて、隨分これに氣づいた先達があつたのであるが、種々の事情に阻まれて、本邦の西アジア學は生長し得なかつたものと思われる。支那學の如きは昔から立派なものがあつたのだし、サンスクリット學の如きも南條、高楠、榊其他の偉才を出したためとは云え、その培養土とも云うべき佛教學が前からあつたし、不完全とは云え悉曇學も古くからあつたので、アラビア學とは事情が違う。假に我國にもイスラム教が相當程度まではいつていたとしたら、恐らく今とは別の相貌を呈していた事であろう。

原因は何にせよ、いつまでも、この學界の大空白を放つて置くわけには行くまい。筆者の狹い見地から氣づいた一二の點を述べて見ると、玄奘の大唐西域記（卷一）サマルカンドの條、唐書西域傳の安國（ブハーラー）の條、及び杜甫其他唐代の詩人の作中に赭羯又は柘羯の事が現われている。古代西トルキスタン地方で名をとどろかした勇敢無比の戰士の事であるが、その原語が何であるかについて白鳥庫吉、藤田豐八諸博士の說があつて、或はトルコ語の suguš とし、又は Herodotus, Strabo 等の傳えた Sacae 族（藤田博士は更にこれを印度の釋迦族とも同じとされた）に當るとされている。しかし同じ對照がタバリーやナルシャヒー等のアラビア史書には shākir（又は chākir）として現われている。これならば赭羯（柘羯）の古音とよく符合するし、意味も、そのころの該地方に行われていた東部イラン語で解釋がつく樣である。白鳥、藤田兩博士の如き大家でさえ、アラビア史料との照合が十分でなかつたら、中央アジア史に關する限り誤りなきを得ない一例としてよいかと思うのである。また中央アジアの運命を決したのみでなく、文化交流の上にも大きな結果を及ぼした七五一年のタラス河畔に於ける唐朝のシナと、ウマイア朝のアラブ軍の大戰の如きも、イブヌル・アシール等のアラビア史書と、支那側の記錄を照合して初めてよく事情がわかる。大體八世紀以後の中央アジア、印度、西アジア、北部アフリカ等の歷史に關しては、

アラビア史料の發言權が極めて大きいことは言を待たぬ。

井筒氏は序文で、本書はアラビア語學としては最少限度のものに過ぎないが、この程度までを確實に自分のものとすれば、千夜一夜物語のような通俗文學の鑑賞や、現代アラビア諸國の新聞・雜誌・小說・評論の閱讀には充分で、「また、史學的研究の必要からアラビア語古文獻の利用を欲する人も」相當程度までその目的を達することが出來ると云つている。して見れば本書の果すべき役割は極めて大であると云わねばならぬ。

ただ、ここに一つ希望を述べると、もつと譯讀の部分が欲しいのである。本書一つにそれを望むのは無理であろうが、もう一册別にクレストマシーを編まれて、それに譯讀を附して頂けたら、またそれが手頃なアラビア文學史の代りにもなる樣なものであつたら一層喜ぶ人が多いと思う。規在の事情では、種々のアラビア語の書を海外から購入することは困難であるから尙更である。千夜一夜物語の如き、成程極めて大衆的のものであろうが、觀方によつては、民俗其他各方面の文化現象研究資料として役立つ點が多く、この點からも尊重すべきものと思われる。所が、そのアラビック原典を入手することさえ、今は中々困難である。

少し傍道へ外れるが、我が國に於けるアラビア語文獻のコレクションとしては、台北大學にあつた Clément Huart の舊藏書と、滿鐵東亞經濟調査局の Gabriel Ferrand 舊藏のものとが一番まとまつたものであつたと思うが、その二つとも終戰と共に失われた。本書の刊行を見るにつけ、、主要な刊行本だけでも一通り揃えた文庫が設立されたら、どの位よい事であろうと思われる。これが無かつたならば、折角、本書の如き好著が現われても、我國のアラビア學はいつまでも停滯を續ける外ないであろう。

〔蘭嶋信次〕

Frederick L. Schuman; Soviet Politics, At Home and Abroad. 7th imp. 1949, 663 pp. Borzoi Book, New York.

第三章に〝成吉思汗の幽靈〟なる一節がある如くに、遠くは成吉思汗の時代より近くは第二次世界大戰の終末に至る迄のロシヤの政治史が述べられてゐるが、勿論ソヴィエットの政治、特に一九一七年のレーニンのロシヤ歸國後の政治的變化に重點がおかれている。レーニンの〝外交と國內政治とを切り離して考へる程誤り易く而して有害な考へはない〟との言を序文に引用し、表題にも國內及び外國に於けると明記し、ソヴィエットの政治を國の內外の面より理解し易く叙述されて居り、且つ初めと終りの部分及び靜的な面より動的な面に重きをおいたと述べられてゐる如くに